

西トップ遺跡の調査と修復

—中央祠堂基壇部の解体・再構築—

1 中央祠堂基壇部の解体・再構築

西トップ遺跡の調査・修復事業は、APSARA機構（アンコール地域遺跡保護管理機構）の協力を得ながら、南祠堂の解体・再構築は2015年12月に終了した。2017年12月には北祠堂の再構築が終了し、2018年1月からは中央祠堂の解体に着手した。中央祠堂は大きく屋蓋部、躯体部、基壇部の3部分に分かれ、屋蓋部から順次解体をおこなひ、2018年11月から基壇部の解体を開始した。

基壇部の解体と再構築 中央祠堂基壇部の解体にあたっては、各隅を中心とする1/4ずつ解体・調査・再構築を繰り返す工程をとった。ラテライト基壇は外側の砂岩基壇と同様、上成・中成・下成の3段構成になっているが、砂岩基壇と比べて様相を異にする¹⁾。建築調査ののち、再構築を順次進め、2020年2月の段階で、南半分は上成基壇まで、北半分は中成基壇を再構築中である。



図70 中央祠堂基壇部のラテライト基壇と東テラス下層遺構（北東から）



図71 カンボジア事業25周年記念式典の様子

2 カンボジア事業25周年式典

奈良文化財研究所とAPSARA機構の共同研究事業が25年を経過したことを受け、2019年12月2日に西トップ遺跡にて、奈良文化財研究所カンボジア事業25周年記念式典を開催した（図71）。式典には当事業に多大なご貢献を頂いた㈱タダノ・多田野宏一代表取締役社長、左野勝次氏、在カンボジア日本国大使館・三上正裕大使、カンボジア側からはAPSARA機構キム・ソティン副総裁をはじめ多くの関係者の方々にご参列を頂いた。

3 仏像台座及び下層遺構の調査

仏像台座の再構築 東テラス上に中央祠堂東面から続くように台座状の遺構がある。中央祠堂東面の解体にともなって、この台座と東テラス南北基壇石材3石もあわせて解体と再構築をおこなった。台座を最下段まで解体したところ、南側で深さ50cmほどの攪乱坑を確認した。解体前の台座は、図72に見るように延石、地覆石、羽目石1石を残すのみであったが、中央祠堂寄りにわずかに残っていた葛石の存在をもとに、台座上半分の一部を復元して再構築した。

下層石敷遺構 解体にともなう発掘調査によって、下層の敷石遺構と掘立柱の柱穴を確認した（図75・76）。石



図72 東テラス仏像台座（上：解体前、下：再構築後）

敷遺構の一部と掘立柱柱穴はこれまでの発掘調査（第11次～13次）でも確認していたが²⁾、今回その全貌があきらかになり、東テラスに関しても数次の変遷が見られることが確認された。下層石敷遺構については、本書58～60ページの「西トップ遺跡の建築調査－2019年度の成果－」を参考にされたい。

仏像の出土 台座下層の深さ50cmほどの攪乱坑より、遺棄された釈迦如来坐像1体が出土した（図73）。仏像は頭部が失われており、蓮華文をあしらった台座上に坐し、衣は偏袒右肩で触地印を表している。また、釈迦如来像の頭部が下層敷石遺構の北側から1点（図74左）、敷石遺構上面から1点（図74右）出土した。これら仏像は別個体であった。過去の台座周辺の発掘調査において、既に仏像頭部が2点出土しており、台座と敷石遺構周辺では仏像や光背など仏教関連遺物の出土が多く認められた。今回の調査で出土した仏像は、いずれもポスト・バイヨン期（13世紀後半～15世紀中頃）に位置付けられる造様を呈している。（佐藤由似・杉山 洋／客員研究員）

註

- 1) 大林潤「西トップ遺跡中央祠堂の建築調査－2018年度の成果－」『紀要 2019』。
- 2) 奈文研『西トップ遺跡調査報告』2011。

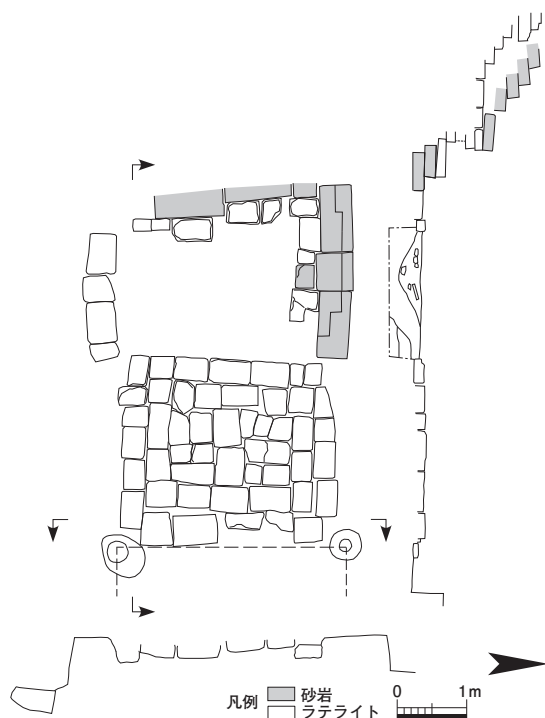


図75 仏像台座と下層敷石遺構平面図 1 : 100



図73 台座下層出土釈迦如来坐像



図74 敷石遺構周辺出土仏像頭部



図76 仏像台座と下層敷石遺構俯瞰写真（東から）